

日々の田高（福島スタディツアーでの生徒の学び・新聞掲載のお知らせ）

令和 8 年 8 月 20 日～21 日にかけて実施した福島スタディツアーでの生徒が感じたことなどを紹介します。また、8 月 30 日には、東北 6 県のブロック紙である河北新報社の新聞にて取り上げていただきましたので、お知らせいたします。

1 スタディツアー実施の目的

- ・震災と原発事故の実態を理解する

東日本大震災と原子力災害が地域や人に与えた影響を、現地の資料館などで包括的に学び、福島と東京との関わりなどにいても学ぶ。

- ・災害の現場に触れ、現地の方にお話を伺うことで、災害と人・地域との関係は何か考える。東日本大震災から 15 年を経た街の状況を見聞きし、現地の方々の思いに触れるとともに、人々の暮らしと復興の在り方など様々な面から各自が考える機会とする。

- ・減災意識を高め、周囲（家庭・学校・社会）への行動を考える

今回の経験を日々の生活にどう活かすかを考え、自分事としてアクションをするきっかけとする。

2 参加者

生徒 13 名（1・2 年生） 引率 4 名

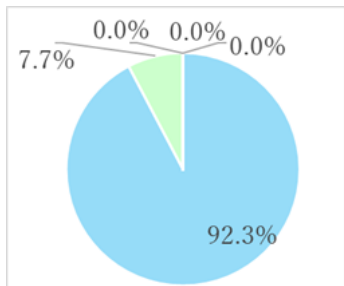
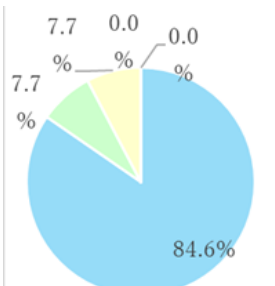
3 主な行程

1 日 目	7:10 品川駅集合	7:43 →品川駅出発→（ひたち3号）→大野駅	11:06 →（徒歩）→
	11:15-11:50 中間貯蔵情報センター→（徒歩）→ふたば文具店→（バス）→	11:55-12:10	
	12:30-13:15 こんどこそ双葉店 →（バス）→東日本大震災・原子力災害伝承館→（バス）	13:30-14:35	
	14:45-15:30 →震災遺構請戸小学校→（バス）→O C A F E（講話）→いこいの村なみえ	16:00-17:50	18:10
	18:30-19:15 夕食	19:15-20:00 入浴	20:00-21:00 振り返り学習
			22:00 就寝
2 日 目	6:30 起床	7:00-8:00 朝食	8:30 8:45-9:00 →（バス）→なみえ新町商店街 →（バス）
	9:20-10:30 ふれあい交流センター（講話）→（バス）旧道（バス）→伝承館（フィールドワーク）	11:15-12:10	
	12:10-12:30 伝承館（講話）→（バス）→道の駅なみえ（昼食）	13:00-13:50	14:00-15:00 道の駅なみえ（講話）
	15:00 道の駅なみえ→（バス）→浪江駅 →（ひたち22号）→品川駅到着→中央改札外解散	15:07 15:27	18:52 19:00

4 生徒のしおりより(講話や見学で感じたこと・考えたこと)

- この活動をやると知ったとき、絶対に行きたいと思いました。
- 今回のスタディツアーで、私は、今まで東日本大震災について、知っていたようで、知らなかったんだと気づくことができました。
- 色々な場所を巡る中で、事前学習やドキュメンタリーの内容と照らし合わせようとしていたが、実際に足を運んでみると。そんなことは考えられないくらい想像の倍以上をいくものが次々と目に飛び込んできた。
- あれほど大きな中間貯蔵施設が除染のために作られていたことに驚きました。
- 請戸小学校を見学して、震災が実際にあったんだと実感した。生の震災跡を見て、津波の怖さを改めて学んだ。日々の何気ないかけがえのない生活を大切にしようと思った。
- 請戸小展示室の映像で、「踊りくらいつながないと何も残らん」という言葉が悲しかった。
- 紙芝居「無念」では、救えたはずの命を自分は救えなかったと責めてしまうことになってしまうのがとてもつらかった。残された人たちの想いも大事にするために、私たちの世代が率先して理解しようとする努力が必要なのかなと思った。
- 原田さんの「住んだ土地をふるさとと呼ぶのではなく、その地域で暮らしていた人々の思いをふるさとと思いたい。」という言葉が印象に残った。
- 自分の目で見て、地元の人たちに聞いたことを、自分のものにして持ち帰り、話してほしい。経験することは、自分の基礎を作るものとなる。自分のためになることをやれない人は、他人のためになることもできない。」この言葉は、ずっと大切にしたいと思う。
- 船の沖出しをしていたが、目の前で波にのまれて命を落とす仲間もいたことを聞き、命懸けで船を守ろうとしていた当時の人の気持ちが痛いほど伝わっていった。
- 高倉さんが、「我々は情けねえよ」と言っていて、その言葉の裏にはどんな思いが隠れているんだろうと思った。高倉さんは、移住者と地元の人との絆の育み方に思案されていた。

5 実施後のアンケート調査

	全体の満足度 高い← 5 4 3 2 1 →低い	友人へのおすすめ度 高い← 5 4 3 2 1 →低い																								
2日間	 <table><thead><tr><th>満足度</th><th>割合</th></tr></thead><tbody><tr><td>5</td><td>92.3%</td></tr><tr><td>4</td><td>7.7%</td></tr><tr><td>3</td><td>0.0%</td></tr><tr><td>2</td><td>0.0%</td></tr><tr><td>1</td><td>0.0%</td></tr></tbody></table>	満足度	割合	5	92.3%	4	7.7%	3	0.0%	2	0.0%	1	0.0%	 <table><thead><tr><th>おすすめ度</th><th>割合</th></tr></thead><tbody><tr><td>5</td><td>84.6%</td></tr><tr><td>4</td><td>7.7%</td></tr><tr><td>3</td><td>7.7%</td></tr><tr><td>2</td><td>0.0%</td></tr><tr><td>1</td><td>0.0%</td></tr></tbody></table>	おすすめ度	割合	5	84.6%	4	7.7%	3	7.7%	2	0.0%	1	0.0%
満足度	割合																									
5	92.3%																									
4	7.7%																									
3	0.0%																									
2	0.0%																									
1	0.0%																									
おすすめ度	割合																									
5	84.6%																									
4	7.7%																									
3	7.7%																									
2	0.0%																									
1	0.0%																									

- 生徒たちは、2日間の行程について、概ね満足しているようである。おすすめ度について、「3」の生徒に聞いたところ、想像以上の状況を目の当たりにしたので、参加する人によっては、ショックを受けるかもしれないと感じたからとのことであった。

6 当日の様子



中間貯蔵情報センターにて学ぶ



浪江新町商店会にて

その他の様子は、こちら https://www.metro.ed.jp/den-enchofu-h/news/2026/08/newsentry_517.html

7 河北新報にてスタディツアーを紹介いただきました 令和8年8月30日

2026年(令和8年)8月30日(日曜日)

とうほく

宮古 青森 秋田 酒田 小名浜
06 4.52 4.54 4.47 4.39 5.24
24 17.11 17.09 16.49 16.40 17.43
14 11.01 11.08 10.49 10.42 11.32
42 23.28 23.39 23.19 23.18 —
(注)データは気象庁、国立天文台による

震災と原発事故 教訓学ぶ

東京の高校生 福島・浜通り巡る

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故の現状を知ってもらおうと、田園調布高(東京)がスタディツアーを実施し、1、2年生13人が福島県浜通り地方を訪れた。現地の人々の思いに触れながら、復興の在り方を考えた。

1泊2日のツアー初日の20日、生徒は原発事故で被災地「O・C・A・P・E(オカサエ)を受けた浪江町を訪問。フエ」で、被災体験を伝えた。町に住んでいた、ふるまひの紙芝居に耳を傾けた。岡さん(奥)が上演する紙芝居に耳を傾ける高校生

見えぬ恐怖 人の心傷つける

自身の経験に基づいた「見えぬ恐怖」は、事故後に周囲が避難していく中で、心身共に限界まで働いた介護福祉士の長女を待ち続け、迎えた行ったエピソードを語った。

「放射性物質という見えない恐怖は人の心を傷つけ続ける。それが原発事故と知ってほしい」と訴えた。2年小野瑞愛さん(16)は「震災や原発事故は発生して終わりではなく、その後生きてきた人たちがいる。自分が聞いたことを他の人にも分かちてもらえるまで伝えたい」と話した。

一行は双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館なども見学した。

企画したのは藤田豊校長。他校の教員だった。15年度、高校生が宮城県内の被災地で学ぶスタディツアーを始めた。田園調布高に異動しても取り組みを続け、8回目の今回初めて福島を訪問した。「現地で震災や原発事故を経験した方の思いを知り、防災や今後の人との関わり方に生かしてほしい」と願った。

(中村 楓)